

## 来賓挨拶

高知女子大学学長 池川 順子

第16回高知女子大学看護学会おめでとうございます。

私は、今年の4月2日から高知女子大学の第10代学長を務めておりますが、卒業生でもありますので、皆さまの学会でこうして来賓というのは何かそぐわない感じもいたしますが、御挨拶をさせていただきますのをお大へん光栄に存じております。

先ほど黙祷を捧げました何人かの方がたはすべて、私も親しくしていただいたなつかしい方がたです。特に、この看護学会をつくり、そして育てられた和井先生は、この中におられるどなたよりも、おそらく一番先に私が存じ上げて、おつき合いいただいたのではないかと思います。私は17才の年に、この大学の前身であります高知女子専門学校の学生になりましたが、その昭和22年から、春・夏などの休暇の折には、アルバイトとして高知県庁の公衆衛生課という所で働きました。和井先生はその職員として勤務しておられました。それ以来ずっと、そして高知女子大学の先輩同僚としても、おつき合い、御指導いただきました。また、20数年前に私がイギリス留学しました折も、アメリカから廻ってこられて、私の下宿に宿泊され、御一緒に旅行したり、思い出はつきません。この学会の発展をいつまでも見守ってくださることでしょう。

高知女子大学の卒業生で構成されるこの学会の発表会も16回を数えます。初期のころは本当に大へんだっただろうと想像します。2回め、3回め、4回め……とどうだっただろうか。記録をみれば分かる部分もあるでしょうが、手さぐりの手づくりの努力だったことでしょう。回を重ねて、学会としての実態が整ってきたと思います。

今は、はば広く全国各地から集ってこられます。研究職、教育職、それから看護の実践の場で働いてケースに熱心に取り組んでいる方がた。各地、各所から、厚い層の背景をもって集われます。そして日ごろの研さんの報告をされ、シンポジウムに参加されます。また講演を取り入れる場合は、そのテーマを翌年のシンポに結びつけられるとのことで、継続による蓄積など、本当に貴重な財産を皆さまで創りあげてられていると思います。

こうしたことによって、本学の看護学科の意義や、また看護学そのものの水準に対する貢献は大へん大きいものがあることでしょう。

この2日間の実りある成果を御期待申しあげまして、御挨拶とさせていただきます。